# 総合知ワークショップ @九州大学

開催日時：2023年4月21日（金）15:00～17:40
開催場所：九州大学 伊都キャンパス ジョナサン・ＫＳ・チョイ文化館 ＋ オンライン会議
参加人数：現地参加22名、オンライン参加70名（理事・副学長、教授・准教授、事務職員など）
議論の主なテーマ：総合知の基本的考え方や戦略的な推進方策の認知度向上を図る。
「総合知で社会変革を牽引する大学」を目指す九州大学の取り組みを紹介する。
プログラム概要：
・内閣府より総合知の説明　・九州大学より総合知活用事例紹介（2件）
・九州大学より組織活動紹介（未来社会デザイン統括本部シンクタンクユニット）　・意見交換

**紹介された事例の概要（2件）と組織活動紹介**

**①「いとしま免疫村のビジョンデザイン」の事例紹介（池田美奈子准教授（芸術工学研究院））**

福岡県糸島市を拠点とし、「免疫」をキーワードに、観光や研究、ビジネス、創作活動など様々な理由で世界中から人が集まることを目指した「いとしま免疫村」の構想を紹介。「免疫」をテーマとした対話と共創の場ワークショップを通じて、企業、大学、生活者、自治体のそれぞれの機会・ニーズ・制約に関する課題をデザイン思考で解決することで、工学研究院、医学研究院、芸術工学研究院などにおける先端の研究成果に裏付けられた進行形のテーマパークの側面と、ほしいサービス・商品を生活者と一緒に作っていく創造の場の側面を併せ持つ「いとしま免疫村」のデザインができあがった。

**②「世界水泳福岡大会ピクトグラム関連」の事例紹介（伊原久裕教授、工藤真生助教（芸術工学研究院））**

2023年7月に福岡市で開催されるFINA世界水泳福岡大会に向けて、芸術工学研究院の研究者や学生を中心としたデザインチームが、大会終了後もレガシーとして活用できるピクトグラムのデザインを作り上げた。福岡市の提唱するユニバーサルデザイン・インクルーシブデザインをコンセプトに、単に見た目を整えるのではなく、多様な人に見てもらうための意味を持ったものであることを目指した。共同で知恵を出し合い、人を対象とした理解度実験なども実施し、さらに、グラフィックデザインと他領域との関係（主に社会包摂との連携）を考慮しながら、実験から実装への段階へと進んだ。

**③未来社会デザイン統括本部シンクタンクユニット活動紹介（尾本章副学長）**

部局の垣根を超えた共創・協働の場づくりのための組織として、未来社会デザイン統括本部を2022年4月に立ち上げた。当本部は、脱炭素、医療・健康、環境・食料の3つの研究ユニットとシンクタンクユニットで構成される。シンクタンクユニットには、2つの会議体が設けられ、未来構想会議は、現在の延長線上ではない理想的かつ実現可能な未来社会の構想を行い、未来実装会議は、様々なデザイン手法を用いてそこに至るプロセスをデザインする役割を担う。また、根源的な問いから社会実装を一気通貫で行うために5つのグループが組成され、各研究ユニットと連携して様々な社会的課題の解決に向けた取り組みを行っている。

# 総合知ワークショップ @九州大学

**意見交換における主な意見**

**（場の構築）**

・これまで人文社会科学系では垣根を越えて協働研究等の活動をすることが難しかったが、学生からの声として、人文社会科学系でも横串を刺した教育や研究をやってほしいという要望が強かったので、人社系協働研究・教育コモンズを設置し、だんだんと垣根が小さくなってきている。
・アジア・オセアニア研究教育機構では４人のコーディネーターを採用し、各専門分野間の垣根をとるということに特化させた働きをしてもらっており、この経験を未来社会デザイン統括本部でも生かして、総合知を推進させていきたい。
・いとしま免疫村のビジョンデザインのファシリテーションについては、研究者と一般市民の間を埋める触媒となるような、関心の強い市民や、デザイナー、地域で代表をされているような方などをうまく活用しながらできればと考えている。
・学内で異分野の先生方との意見交換の場が増え、実際に理解できるという実感を得ることで、そこから次のステップとして新たな発想を生むことにつながっている。

**（人材育成）**

・ひとつの学部（芸術工学研究院）の中には異なる分野の教員がおり、なかなか両者が交じることは難しいが、これを実現してくれるのが学生である。「分野」の垣根を超えた教育を受け、知識や考え方を広く持った学生が出てきて、また、研究側にも良い効果を生じる可能性がある。
・一つが学生段階での教育である。デザインという言葉で人々を結びつけるのがデザイン学であり、芸術工学研究院ではカリキュラムとしてすでにできている。また、九州大学で５年前に設置した共創学部は、学生自身が課題設定し解決のためにどのようにアプローチするのかを学ぶ学部であり、この学生たちが将来社会へ出ていくと「総合知」の考え方をもって活躍できると考えている。
・学術推進職（特殊性を有し高度かつ専門的な知識等を必要とする全学的な業務および当該業務に密接に関連した研究活動業務）など、自分の専門領域だけでなく、 横をつなげていくような職を大学内に作っていくことが重要である。

**（問いの立て方）**

・どれだけ違った立場の人たちを集め、どれだけ違う立場の人達が一緒になって議論ができるような「良い問い」を作ることができるかがデザインの鍵になると考えている。

**（総論）**

・多様な分野から教員が参画すると、想像を飛び越えた意見が出てくることもあるが、意見交換を重ねるうちに、ある方向性が見え、意見がまとまってくるものであり、まさに多様な分野が集まらないと実現できない現象であると考えている。
・学内関係者やステークホルダーに九州大学が考える総合知とは何か、総合知で何をしていくのかという認知度を向上させることを広報戦略の最優先事項に挙げている。一般市民の総合知の認知度はさらに低いので、国としてもその場づくりを行う必要があると考えられる。

# 総合知ワークショップ @九州大学

**アンケートにおける主な意見**

**（場の構築）**

・各連携プロジェクトの成果や課題を共有する協議の場があるとよい。
・ワクワクするようなビジョンを描き実装できる場があるとよいと考える。
・まずは仲良くなることが大事で、学内、課外活動でもそういう機会を作る仕組みがあるとよい。
・人的交流はある方が良いが、それだけが目的となるのは望ましくないように思う。
・大学、企業間の相互の人的交流は社会実装を進める上で有効。さらにそこに一般市民も参加できるとより実装が進むと考えられる。
・「九州大学らくちんラボ」では、多領域の研究者、当事者、実務者の３者がコーディネーターのもと連携し、ひとつの場で当事者の困りごとを聞く取組みを実施している。
・価値観や、領域の異なる人同士の人間関係の構築は、なかなか最初は難しい面もあるので、URA等の活躍はある方がよい。
・一つの学問を究める専門的な知識も重要であるが、その分野に長けている人々が集まると知識があるが故に、むしろ調和が取れないことが考えられうる。それに際して各分野に一定程度理解があるコーディネーターやURAが間に入ることで目的達成に向けて円滑に進むと考えられる。
・各個人の手腕や使命感、意欲などによってうまくいくこともあると考えられる。役職や専門分野を越えて、自らもコーディネーターになるつもりで、ワークショップに参加すると場がより盛り上がると思う。

**（人材育成）**

・個々人の取り組む課題・研究対象に関して学部での学問以外に様々な観点があることを教え、その観点に関しても知識を深めるようにする。
・すでに実装化された社会課題への対処実務を日々行いながら、一つ高い次元から課題の成り立ち分析と「次の手」を構想することを自分に課している人材が求められる。
・高度な専門知を構築し得る人材に、オールラウンダーを求めなくてもよい。自然人ひとりの実経験から獲得するものの集積よりも、理念の構築や理念にそって健全かつエネルギッシュに運営される組織間の対話、協力、連携が本筋。
・様々な場面で活躍できる、コーディネーターやファシリテータの育成も大事であり、既存のサイエンスコミュニケーターも活用できると思われる。

# 総合知ワークショップ @九州大学

**アンケートにおける主な意見**
**（人材活用・キャリアパス（評価））**
・多領域の専門家をつなぎ、かつ実装を実現するコーディネーターには、研究者的視点と実務者的視点が必要であり、双方の経験を有する者が適している。
・現状を維持する人材ではなく、裁量をもって自由にチャレンジをする人材について、一定数、活躍できる持続的ポストを用意する必要がある。
・アカデミア研究者の人材流動性は大学間では上がり、それ自体は良いことだが、そこからいかに広がりをもたせるかが大事。
・問いやビジョンを持ち、問いの答えやビジョンを何らかの形にして世の中に貢献できたかという観点の評価があるとよい。
・誰がどのように評価するのか。具体的な成果が可視化されないとゼロになってしまうようでは、社会に「総合知」がしみわたることにはつながらない。
・論文の質・量を向上させることを止めないような形で、適切に「論文だけでない業績」の評価をしていくことが大事。
・キャリアパスとしては、色々なことを知ることも必要なので、URA等の経験などはあるとよい。
・URA等の連携業務をキャリアパスや個々人の評価のなかでいかに位置づけるかが大切。他部局、他大学などでも評価されるような共通の軸になるのが理想だが、価値観の共有が必要なため、簡単には思えない。いかに乗り越えるかは、まずは業界の意識改革であろう。

**（総論）**
・誰かの「知」に頼ることばかり考えず、国民一人ひとりが新たな知の生産に関わろうとする姿勢こそが期待される「総合知」の姿。必ずしも成功だけではないが、専門家の研究がそうであるように、やり方や取り組みすべてを残し、きちんと知を集積させることこそが重要。その中で、市民が主体となる研究の取り組みであるシチズンサイエンスの発想を広めることも重要。学業の成績などとは関係なく、国民一人ひとりが知の担い手である。